

交易問答

上

福岡第一師範學校  
(學校圖書)

登錄 番號	第	號
門		
商部		
外國貿易 交換貿易制		
B21 目次		
全 1 冊，內第 1 冊		
分類 番號	第	號
678.153 39520		

圖書 和圖書 遡



a 1 3 8 0 3 2 7 3 6 5 a

福岡教育大學藏書

T1A1

67

Ka86

6

K

(1)

ふも甚時勢の通開ありきとていふ



一 古風甚きを以て一 五ふくくとも  
家曉は論人々心解るるを其契  
遇に得るに之にま類稀見の國を  
棄阿多を因より辨を候す一て明な  
きと細式の齋隨より事理を論じたるも  
前日証書の論の如く亦天下の事は棄

る一と云ふ一のす方々 皇軍大に收束  
一 士人の此書は志に表るに生きたれも  
新詔大和魂の如く因隨は例あるもの  
非ざるを知らずて自ら開闢の可き時を  
も預めずくはして舊來の弊に自ら  
除せんを豫め初は一と往々此書に愛

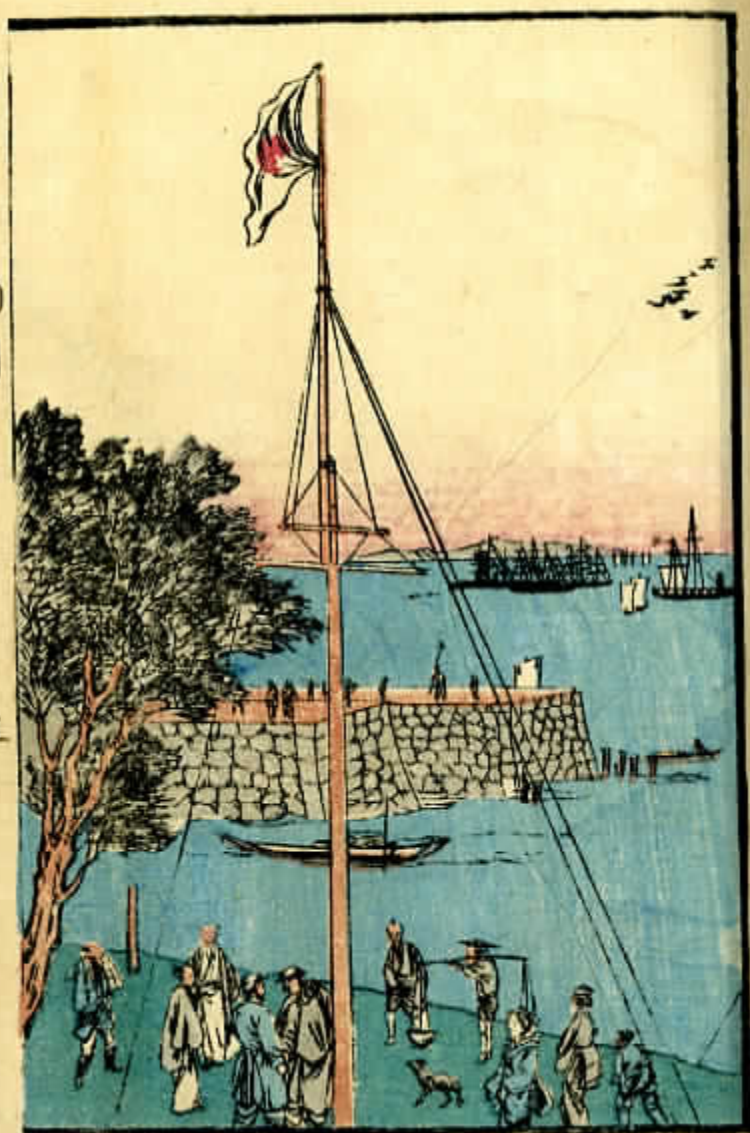
之きは細氏の御見のみ細氏固より 望  
集より信ずすものなれば能く開鎖の済失  
を細氏に頼み頼むの時にて余之を  
たひ細氏を以て相開鎖の利義を曉  
し知て頼すもの老要心より之を教此小  
冊を著し以て世よるせんは唯其父

銭作者は倣ふものの如く大分れ安を  
免れしといふも因より此書を著すの意  
唯其父婦を教諭するなりて教て士  
人は亦より為るありあき明をかり

明治二年三月四月

加藤知蔵徳

小島廣書



交易問答卷之上

加藤弘藏著

碩六

ナント才助君僕ハ一向合点の参り申  
 さぬとがござる。今度お儀と申は者  
 がゐくるつて天下のお政事ハ  
 天子様でゐさる。松ゐるつて。是迄  
 お公儀と可愛かりあつて醜夷等ハ



此より拂様なるるごろうと思て  
居ます。さう。矢張以先の儀と同  
じ。加う大坂や兵庫より交易場  
を開きよかり。又東京でも交易と開  
きよさるといふ。何ふとござろう。  
どうも。頼六杯より一向合点が参り  
申さん。或先生の話よえ来け。日本  
といふは神國でござる。日本

人の知恵といふ者ハ申く醜夷等の  
及びもあいに。物事何も角も千  
と傳つて。何事不足のまいといふ。  
界随一のふざけでござる。そこで  
の深い醜夷等ハ己がまゝ悪國で。物  
も何も角も不足ごらけ。あつら。世  
中の國くうら。唯々々の日本。浅  
目見て来て。彼奴等が國の何の益よ

も立ふい器物を持越して。日本の  
結構な品と買出。かひく日本の  
諸品と買ひて。日本人と弱らせ。  
結局は日本の西國迄。彼奴等が  
物を買ひて。不届子なる企を  
するのてござる。夫故近年諸色  
あひく拂屋より。壺俵ハ日々の  
倍より。何れも三倍や四倍  
倍

より。あつたるい物のふいといふハ思へを  
く。何れも甚の事てござる。是と  
いふもみんな醜夷等が仕業でござる。  
是れは醜夷等と。何れ  
天子様ハ大事よなさつて。彼奴等がい  
ふ通りなさるでござる。僕等の  
根が三錢もあつたるい老老翁も  
實は切齒やうでござる。ナント才助君。

そりていござらん。

小助

頑六君足下ひとく交易のふと見る  
くいひるさるる。僕よハ是下の理窟  
ハ一向かりません。僕ハ或先生のち話  
と毎度聞まゝさる。交易といふものハ  
うけてるうるいりのことりてござる。  
なせといふハ其證據又ハ先ツけき畧

の開け始まり時分を農業は道ハ  
勿論衣服を製へることもあ。況  
て家を建るといふこともなふさる。  
其後神様のおうけ。おひく  
農業の道もひらけ。又どうやうや  
衣服をうらうることも知り。衣  
を建ることふとも開けこのぶそ  
うもあつる。併其もぐめを各人ハ農

業も志し。衣服も製へ多し。家も建  
るといふやうなこともあふ。  
手廻りねね。加之何も角もよいこ  
とと出来るんどこと見える。お  
くす。きッの知恵が出て。各人何  
も角もすはのきやえ。壁へを人  
も農業をして稲麦を作り。又人  
家を建てるのを家業とし。今人衣

服を製へるのを家業ふすはと  
わ。其外すづいてる。の家業を  
分けて。各人其家業むりに精出  
て。壁へも農業をして稲麦を作る者  
も。自分と其女房子の多へる。け  
へ。其餘も人の製へる衣服や。又  
人の建てる家柄と取りへ。家を建  
る家業のものも。人の家を建てやる

代<sup>か</sup>も。其人<sup>ひと</sup>の作り<sup>つく</sup>と稲<sup>いね</sup>麦<sup>むぎ</sup>などの。ま  
とも製<sup>つく</sup>つと衣服<sup>いふく</sup>などのを。貰<sup>もら</sup>ふとつ  
振<sup>ふ</sup>みあつとそのと。是<sup>これ</sup>が即<sup>すなはち</sup>交易<sup>こうぎ</sup>の始<sup>はじ</sup>  
まりとさうとさう。今<sup>いま</sup>も交易<sup>こうぎ</sup>とさ  
つといふも。西洋<sup>せいよう</sup>人の品物<sup>しんぶつ</sup>を日本<sup>にっぽん</sup>に買<sup>か</sup>入<sup>いれ</sup>  
て。又<sup>また</sup>日本<sup>にっぽん</sup>の品物<sup>しんぶつ</sup>を西洋<sup>せいよう</sup>人に賣<sup>う</sup>る  
事<sup>こと</sup>の振<sup>ふ</sup>み思<sup>おも</sup>ふけれど。決<sup>けつ</sup>してさうで  
ない。其<sup>その</sup>振<sup>ふ</sup>み人<sup>ひと</sup>は自分<sup>じぶん</sup>のさうらつと

おと。人のさうらつと物<sup>もの</sup>とを取<sup>と</sup>りつる  
うら。交易<sup>こうぎ</sup>といふのでござる。そこで  
又<sup>また</sup>おひく。甚<sup>いた</sup>か開<sup>ひら</sup>けて。お業<sup>わざ</sup>もごんく  
分<sup>わ</sup>れて多くあり。盛<sup>さか</sup>えもなる又<sup>また</sup>従<sup>したが</sup>て。  
自分<sup>じぶん</sup>が振<sup>ふ</sup>み方<sup>かた</sup>に馴<sup>な</sup>れり。物<sup>もの</sup>と  
おとと交易<sup>こうぎ</sup>する振<sup>ふ</sup>みでハ。それ又<sup>また</sup>時間<sup>じかん</sup>  
が費<sup>つ</sup>て。又<sup>また</sup>其<sup>その</sup>お業<sup>わざ</sup>はうとらす。減<sup>へ</sup>る  
不<sup>ふ</sup>便<sup>べん</sup>利<sup>り</sup>なつとりのござる。そこで其<sup>その</sup>

中又這入て。双方交易の紹介として。  
利と儲ものゝと家業とする者が出来  
たり。是が即商人の始りとするので  
ござる。商人といふ者が出来た。  
百姓ハ農業斗と。又職人ハ各人其  
家業さつて居れた。商人が中  
にいつてとてハ稲ハの作つて。稲  
麦と。糸助の方又持参りて。糸助の

製つて衣服と取りて。其衣服と又  
稲ハの方又持参り。或ハ稲ハの方  
てハ。衣服八十疋也。最早不用るれ  
ど。傘が入用也。傘四立本持て参  
つてくれるといふ。又其衣服と  
笠傘が方又持参りて。笠傘の製  
つて傘と取りぬて。其傘と稲ハ  
が方又中といふ根。すべて法

の便利なる格よ。其代ハ  
其世話料。縮ハガ方。て縮麦  
少。糸助ガ方。て衣服一二枚。  
笠平ガ方。て傘一二本。と貫て。  
其内不用るあがあれバ。又入用  
るあ。と取。つ。杯。て。蓄。て。居。  
り。れ。と。見。つ。る。それ。う。又。世。が。後。  
と。聞。て。家。業。も。救。る。よ。う。れ。

統てハ商人の仕事も。退く。繁昌  
なる。又。従。て。何。か。も。あ。と。あ。と  
と。取。つ。る。格。で。ハ。誠。は。不。利。合。で。  
譬。つ。を。藏。あ。屋。の。杼。助。ハ。酒。を。外。  
欲。け。れ。ど。自。分。の。藏。つ。と。及。あ。  
を。又。と。酒。を。外。の。各。う。つ。ハ。不。利。  
均。で。出。来。ず。され。を。と。く。反。あ。  
と。切。り。て。ハ。用。は。立。派。又。藏。屋。の。

半日亭ハ。紙と砂糖と云うにけ  
れど。砂糖屋に其差ハ。紙と云う  
る事と好まぬと云ふ振る事か  
出来て。何分又も不都合なる身  
起つ。左そこで。あつた代り  
知恵が。出て。市上で通用金と  
り。老とり。らつて。物とあ  
と云うる代り。又通用金と用

る振。又して。下さつ。りのと云う。  
け通用金といふ。者が出来。る。職お  
屋の。村助ハ。自分で。職と。反あ。と。最  
初。又け通用金と。云う。て。とけ。バ  
蕉。と。反あ。と。持。出。さ。ば。と。も。け通用  
金。で。酒。と。外。あり。と。二。外。あり。と。勝  
手。次。来。と。買。ふ。事。が。出。来。又。紙。屋。の  
半日亭。も。最。初。又。金。と。通用金。と。

なりつておけば。其通用金で砂糖を  
りなりと二りなりと。只も粗米を  
るが出来る程なりなりと。そこ  
で酒屋でも砂糖屋でも。自分の  
あとで通用金となりて賣ること  
な。以てあゝと物々と交易しと時  
とハ都合がくまりて。明日は  
け通用金で塩と買ふと味噌と

買ふ。但ハ本年先來年迄貯て  
置と。勝つ次第なりつて。酒や肴の  
程は腐るけれど。又稲や麦  
の程は火さふと腐る。積むうも及  
ばない。と都合のよい事なりと  
ので。それより商賣かすこと  
盛なりて来す。け程は通用金  
が出来て。それで商賣をとり程

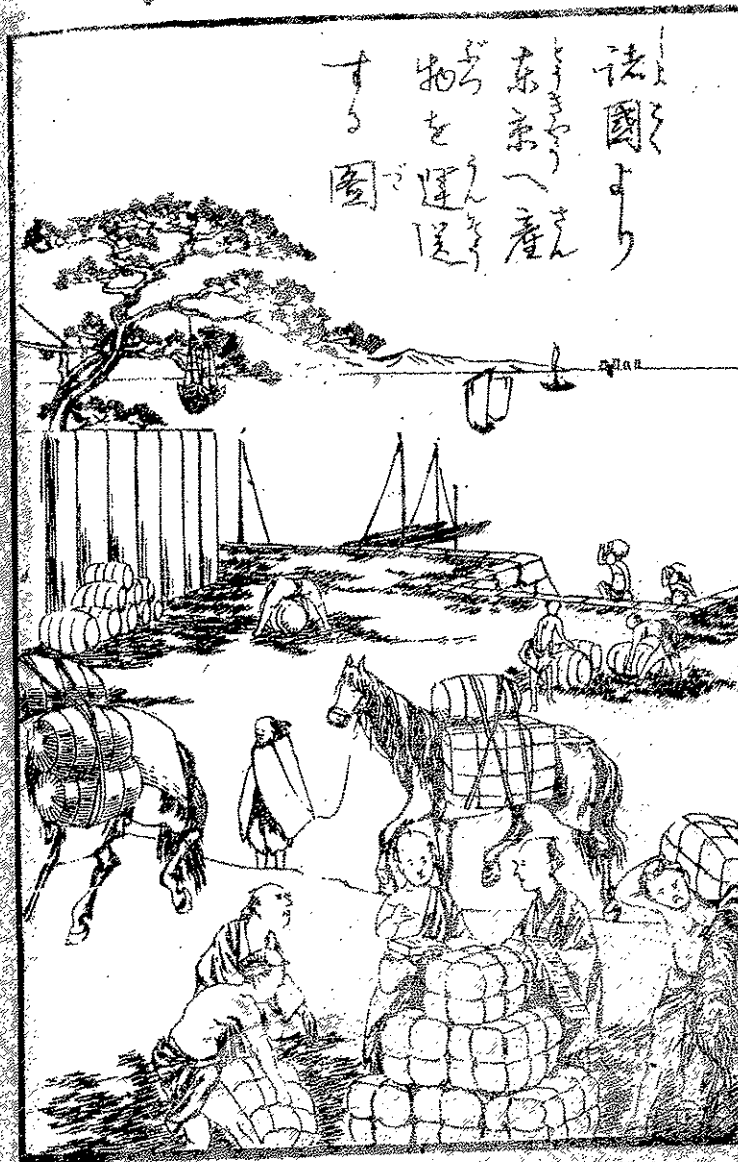
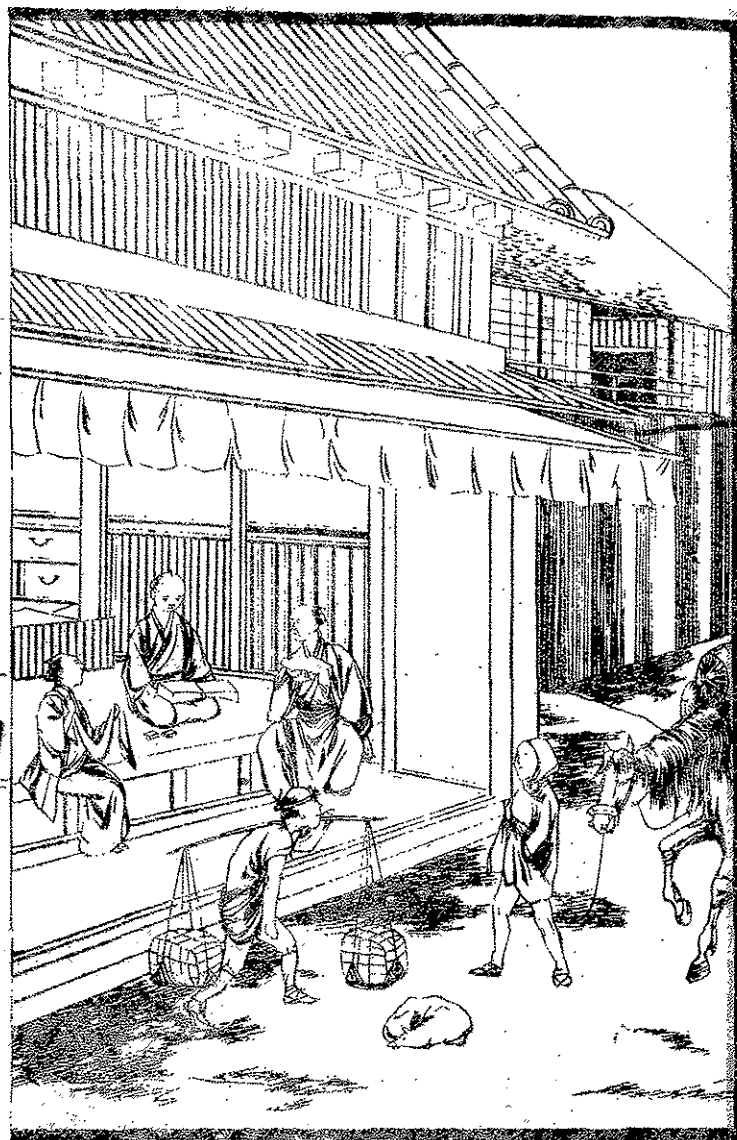


買といふはありつゝがごとく  
世の中が開るは後くる姓の作り  
出すあや職人の製つ出すあも多  
くあり又其仕方も巧者よりてあひく  
よい物が出来る振るありさゆへ  
譬バ箱前の蠟燭ハ日本一づの  
土佐の鯉節ハ金類づのとて  
振るありて其全國五六拾里乃至

百里余の處よりとも買ふ来る振  
るあり。それよりあひく開て大坂  
づの東京づの。長崎づのと。繁花  
る出地ハ八國より其國產と。船  
やるを持ち出す。また他より持  
出す國產と買ふ振るといふ振  
るあり。さうはさうでござる。そ  
うして見れば。今西洋人が。彼奴

等が日本の産物と日本も持ち来て。又日本の國產と買て降るのも。同様に道理でござる。伊故といふり神様の眼より御覧るまされば。土佐や筑前より。東京や大坂も國產と持ち出たのも。英吉利や和蘭より。日本も國產と持て来るのも。唯遠いとをいふで。何も變つさうハ

ござらん。又張彼奴等が國の産物や呉羅ハ日本もあいら持ち来て。もう日本の茶や糸ハ彼奴等が國の茶や糸よりハ。ぶどうより買て参るのでござる。夫きく見れば一村一郷の賣買も。關東と西國との賣買も。日本人と西洋人との賣買も。かも變つさ道理なない。で





をる格どが。係足下ハも。醜夷<sup>ウイ</sup>よ  
ぶよされく居るさる。伊故<sup>イコ</sup>とりふ  
ろ。と話<sup>ワタ</sup>し通醜夷<sup>ウイ</sup>が来てく  
日本の諸色<sup>シヨシキ</sup>がひく。醜夷<sup>ウイ</sup>の邦<sup>ホウ</sup>は  
出て行く者どり。け三四年以來<sup>イライ</sup>  
といふり。諸色<sup>シヨシキ</sup>が日くの格ど  
あがつて。先刻<sup>センコク</sup>もいふ通。何でも三  
増倍<sup>ゾウバイ</sup>や四増倍<sup>シヨウバイ</sup>よりいふいあ

ござらん。け上げ候<sup>コウ</sup>で最早三四年  
も續<sup>ツヅ</sup>りれる。それこそ日本國中  
の老かみんるを食<sup>イ</sup>するより。外<sup>ガイ</sup>  
は仕<sup>シ</sup>がはるる。りと思ふのよ。と  
まけよ。東京や大阪で交易<sup>カウギ</sup>  
がどく盛<sup>シメ</sup>よる。うら。僅<sup>ワザ</sup>き  
年々半半の間よ。日本の金  
銀や諸色<sup>シヨシキ</sup>が。そんな醜夷<sup>ウイ</sup>の

よといつてあまつく。結局よ日本  
の國すくも。彼奴等が物入るる  
のハ必定でござる。ナント才助さん。ま  
でも交易といふのはあるけれ  
ばならぬいれどござる。原腹  
痛いつけでござる。

才助

それハ彼六君是下かまも本道の道理と

知るさらんう。そんな事といひな  
さるが。け三四年以來諸色のさる  
つこのハ決して交易のなすでハるい。お  
まわりく海のある事でござらん。む  
も交易といふものハ全渡始つて俄に  
盛なるつこので。諸色のをけおが  
一旦は多くるつこのさる。随分  
それなりでも法色があがらん。ま

相違ござらんが。僱<sup>い</sup>先生の由<sup>よし</sup>話と  
うてよ。交易で諸色のおがらのハ實<sup>じつ</sup>  
ハどういふでハまい。却<sup>かえ</sup>て後<sup>のち</sup>くのうあ  
うハまいとござるそつでござる。何<sup>なん</sup>れ  
といふよ。由<sup>よし</sup>活<sup>かつ</sup>する通<sup>と</sup>交易で諸  
色のあがつこのハ元<sup>もと</sup>來<sup>きた</sup>諸色はま  
けうことが多くあつこりらのゆで  
ござる。そとでまけうことが多く

ふれはるるほど元の仕<sup>し</sup>出<sup>で</sup>も自然<sup>ぜん</sup>  
と多くあつる勅<sup>ちく</sup>定<sup>てい</sup>でそれだけ日  
本<sup>にっぽん</sup>中<sup>ちゆう</sup>ぐ出来るふあかふえて  
畢竟<sup>ひつじやう</sup>ハ日本國の身<sup>み</sup>上<sup>じやう</sup>がよりあつる  
のでござる。そとでまけうしふ極<sup>ごく</sup>  
くさよぶんくと元の仕<sup>し</sup>出<sup>で</sup>が多く  
あつる日本の諸色か殖<sup>殖</sup>てくれ  
バといふよ。居<sup>き</sup>合<sup>あ</sup>ひ付<sup>つ</sup>てくらうら

自然ともし遠色かさがつてくる  
のハ眼又見え道程でござるより  
交易で諸色のあづまるのハ一体  
大く目と着て見れば後々乃  
うもハけ上もい結構なるも  
そりてござる能考て見ると實  
よそれ又相遠るい畢竟遠色の  
とけ方が澤山よりより高直

もーても買人がいくらもある。買  
人がいくらもある。おあを仕出  
す人があえてくるお物と仕出す人  
があえてくる。居あがぐんくと  
多くある。おあがぐんくと多くある。つ  
てくると成丈手輕よりーらつてあ  
でも下直は賣る根は競てくる。そこ  
ぐあひくよ居合が付て。遠色がさ

がもの自然の道理はお違ひござ  
らんそれどうも今ハもゞ交易の  
略つさ身の方でまけうこの方が  
滅法多くて仕出の方がまゞ割  
合ふすくまいうら。臺安雜儀る  
所どが是くも五年拾年後のゆを  
考て見るとおひくも日本國の身  
上かういふる道理で是程結構る

事いふのでござる。け二二年と  
いふりれの田舎がむひよき  
るうといふのも。臺も交易ぐん  
く法色のまけ方が多くるうら  
のゆでござるが。あうまづえの仕出が  
連もまけうこの割合ハ多くるうい  
た。諸色がいくらでもきくられりの  
ぶくらいハ田舎の方がよくて。町も

誠マコトに難儀ナニギする程ほどが。是こゝより小三四  
年ねんも立て。世よの中なかつが穩やすなるらふりれ  
る。えの仕出しだがぶんくと多くるる  
ら。諸多しよたの直候ちかうがあひくと下くだつて参まゐる  
のハ眼めは足たりるめでござる。保い是こゝよりハ  
昔いふの日本にっぽん國內うち才なりの賣買うかいと遠ちかて賣買  
の道みちがあひくよ大おほくするらう。割わりす  
て見るみるととけ方のたゞりが。どかーても

始終しじう多おほらふらう。迎むかも昔いふの程ほど下  
座いざなる事ことはふるまひけれど其代そのしろはハ  
昔いふより西洋國しやうやうこくの品しながあひくと  
つてくる。又また交易かうぎがぶんく盛さかなるれ  
ばる。ふど。日本にっぽん惣俵そうひょうの身み上うがくるら  
て骨折こね改才かいざいとんる儲もちでも。出でる程ほど  
よりるら。息いきさへいふけれ。結句くく昔いふ  
の下座げざであつと時ときがよりハ余程よほど著しやう

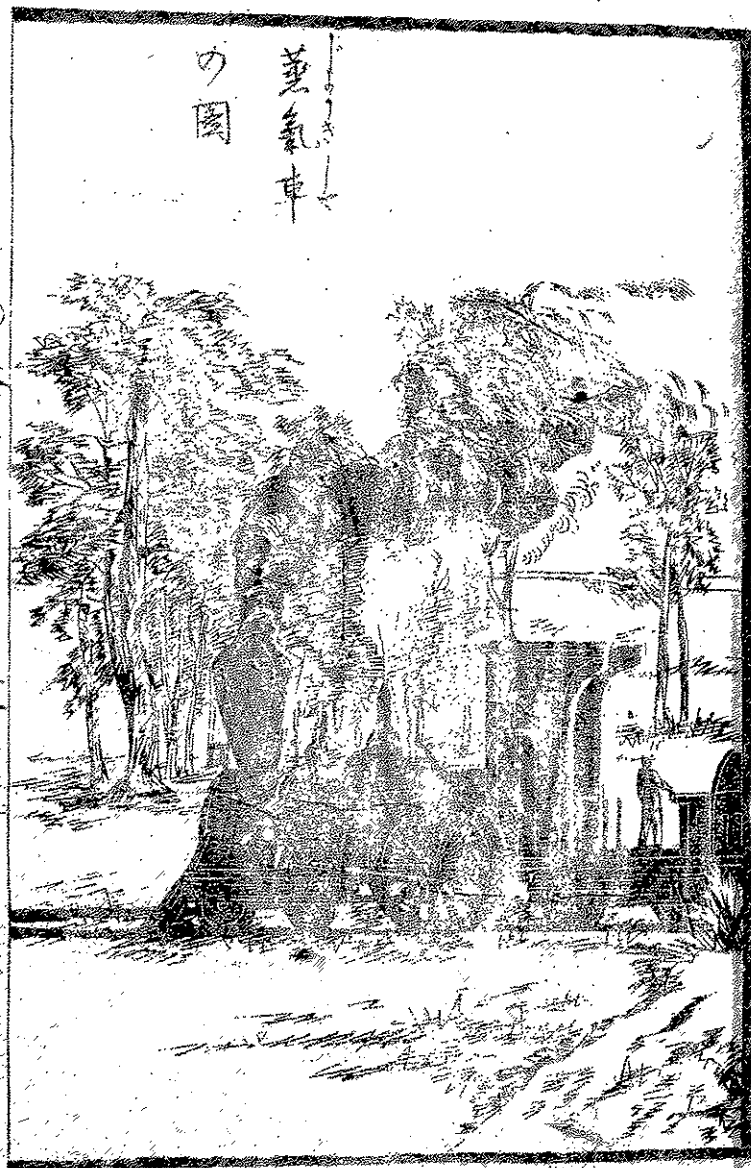
うゝるゝ相<sup>あひ</sup>遠<sup>とほ</sup>びざらん。田舎と東  
京との事と考て見るゝ。東京とふ  
處ハ開<sup>ひら</sup>きとゝろで諸色<sup>しよしき</sup>が田舎よく  
らべて見てハ滅<sup>めつ</sup>法<sup>ぽう</sup>といふ。余程暮<sup>く</sup>  
すくい道理<sup>だうり</sup>だけれど。働<sup>はたら</sup>えられを  
東京と金<sup>かね</sup>の儲<sup>もち</sup>る変<sup>かは</sup>はるいふ。知<sup>ち</sup>  
恵<sup>け</sup>のある奴<sup>やつ</sup>ハみんな東京よ出て身<sup>み</sup>  
上<sup>あがり</sup>と大<sup>おほ</sup>くするでいざざらん。それと同<sup>どう</sup>

ト事で決<sup>けつ</sup>して物のやすい変<sup>かは</sup>がよい  
場<sup>ば</sup>変<sup>かは</sup>とりふけでハるゝ。都<sup>みやこ</sup>てあの  
い変<sup>かは</sup>など。よく開<sup>ひら</sup>き場<sup>ば</sup>変<sup>かは</sup>でござる。うゝ  
そりふ場<sup>ば</sup>変<sup>かは</sup>でるければ建<sup>たて</sup>も金<sup>かね</sup>もけ  
の出来<sup>でき</sup>る。それハござらん。保<sup>たも</sup>そりハ  
かりの。交易<sup>かうぎ</sup>がむい。盛<sup>さか</sup>るれば。どふ  
しても自然<sup>しぜん</sup>と諸色<sup>しよしき</sup>の下直<sup>したな</sup>るゝ。うゝ  
ければ。うゝん道理<sup>だうり</sup>が。うゝ。き。つ。で。さ。る。

是ハ何と云ふ又西洋人の方でハ。を來何  
でも機器仕掛で走るものと發明して。  
譬へハ稻麦と搗くとも。其機器有  
りたぶうら。人よりいらば。百石や二百石  
の稻麦ハ僅半時を。其時の間ハ。是ハ搗  
く事も出来る。又物を運送するも。  
海ハ蒸氣船陸ハ蒸氣車といふ。  
蒸氣の力で走るものがあつて。是もや

二百里の處ハ半日。一日ハ運送が出来  
る。又遠國同士でも。紙の取遣ハ。傳信  
機といふ機器があつて。百里でも二百  
里でも。煙火一服吸ふの間。用外が  
無く。といふ程。譯でござるう。すぐ  
て。諸色の煙火も。自法と下。並う。う  
そつでござる。そつといふ。け。う。う。後  
西洋人との交際が。よく。廣く。され。

蒸氣車  
の圖



日本もあひくそんな道具がとつて  
あら振るもあり。又見習て製る振るも  
あつたり。そりるれば諸色が自然と下  
垂るるのハかりとつて話でござる。す  
べてうりふ屋程のものはござる。交易で  
一旦諸色のおがるのハ決して分配する  
よへ及るいふでござる。併又先生のお話  
とまう。其ハ諸色のうりまのうりも

種々がある。其中にも世の中が穂か  
らあいので、えの仕方がとひく減て。  
諸色のおがるのと。通用金が悪く  
つて諸色のおがるのが一歩うまいと  
でござる。往昔西洋國のもう、十  
開るつと時分は、いふの王様が通用  
金とてひく。次替て。ぶんく。其真價  
と悪く。さうであつて。それで諸色を格

介はあがつて滅法世の中の難儀よろろ  
 ころがあつたらうと云ふ。是が一歳と云ふ  
 るで。通用金が悪くあつて諸色のあ  
 ぐらといふのハ實ハ通用金の名價がさ  
 つこので決して諸色のあがつて譯でハるい  
 何故といふハ金銀の名目ハ古昔と變りか  
 らうつて。譬を一ドル 西洋人が交易は用ゐる ハ昔も  
 とも一ドルといふ名目でありうと云ふ。

吹替のふびごと。其金の性からく  
 るつて。今の壹ドルハ昔の半ドルよりも重  
 らるゝ位なるもの。昔壹ドルで賣る  
 物ハとてハ二ドルも三ドルも賣らる  
 けれハ。昔の壹ドルの金と取つて割る  
 らるゝ位にせざるに聞て斬ぐハ壹ドルのあ  
 が二ドルも三ドルもあつたらうと云ふけれど。  
 突ハ何れも諸色の相場があつたらう

でハるい。都て通用金の真價（ね）がふづつ  
 のでござる（但一ト下とふ金の真價が今ハるくまろ  
 といふハあるに唯是、喻よりいふるなり）  
 丈右目（り）の根は法色の相場がくるつて。  
 中へ交易で法色のおる根ふりでも  
 ない。識世の中（し）の難儀といふりねハ。  
 通（と）の事ではるつゝそりてござる。  
 保王様（たう）の威光（い）ぶる。金銀の性（しやう）と  
 悪くも中りと善くも中りと。儲（た）み及（い）来（き）

はるといふりのあよりといふむ  
 法（は）政（せい）通（と）で實ハ國（こく）の衰微（すい）と招（まね）く  
 根ふりれでござる。むもけ根ふりハ昔  
 開（ひら）けあつた時（とき）分（ぶん）のふで當時（たうじ）ハ其根  
 ふりハるいそりてござるすべてあつ  
 りふりけづる。諸色（しよ）のあがりのも善  
 悪（あく）があつて。交易で法色のおがりのハ。  
 後（のち）ハむか開（ひら）けて。ふんぐと身上（しやう）のふ

ろつちきり。又世の中が穩ううういひで徳  
色のおぐるのと。また世の性ぐるううつて  
諸色のおぐるのハ後世の才の難儀  
が増え。どろくどろくと國の貧乏よろるき  
どろろでござる。

### 頌六

足下の講釋ハ、くまうりき。成親世  
の中が穩ううういひで。徳色のおぐる

のと。金銀の性ぐるううつて諸色  
のおぐるのハ。実より近もるいひとい  
ふは相遠まいが。交易で徳色のおぐる  
のハ足下のしひううする通眼前の所ハ  
こほくつても後世のうういひ都てまい  
のでござらう。係足より考て見る  
さひ。  
神武以来は拾二三年あそ  
もで。凡そ五六百年来といふなり。

まきッ醜夷いづつんのさうと取ふせむとも國こまつ  
ふゆのさういけ日本國でいごさらんり。  
それぶのよとさうつて。伊も急いよ爰あ  
のさうさうふよ。さうりらうくさう交  
易ぎとさうめるよハ及およふゆでござる。  
尤往昔むい太閤様たか時分ときぶんも。醜夷いづつんが来き  
て交易ぎしうもあり。又其後も長なが  
崎さきハ毎年まいねん和蘭人わらんじんや支那人しなじんが来

て。交易ぎしうけれど。是これハ日本にっぽんさうく  
つて國こまとさうふと持越もちこさうふで  
ハさうい。いさぎ解とけなとでござる。成程なるほど  
是これハのさういさう通醜夷とつんと交易ぎと  
さうめられバ。該色がいしきのさうけうさう多く  
さうさう。一旦ハ該色がいしきがあらさう。と  
れです。自後みづかと元の仕出しでが多おほくさ  
つてくるさう從したがう。さうしうさう

澤山よりつておこでやういひく  
盡<sup>お</sup>辰<sup>さ</sup>さがるうら。交易で徳色の  
あぐるのハ。いふよお遠もるうら  
ふら。係<sup>け</sup>丸<sup>ま</sup>で初<sup>は</sup>うら。交易とあるけ  
れバ。徳色<sup>とくしき</sup>が殆<sup>た</sup>終<sup>は</sup>下<sup>か</sup>盡<sup>ま</sup>るり又居す  
こつて居るうら。其方が猶<sup>なほ</sup>いふ  
とさらんら。それとも日本が醜<sup>しう</sup>夷<sup>ぎ</sup>  
の玉<sup>たま</sup>うら。徳色と買<sup>か</sup>入<sup>い</sup>るけれバ。活<sup>くわ</sup>計<sup>けい</sup>

が立<sup>た</sup>うといふ國<sup>くに</sup>うらバ。それも仕  
方<sup>かた</sup>うらいか。ともいふ通<sup>と</sup>醜<sup>しう</sup>夷<sup>ぎ</sup>の國<sup>くに</sup>探<sup>たん</sup>  
とハ遠<sup>とほ</sup>て。日本國內<sup>にっぽんこくうち</sup>の徳色で。十分<sup>じふぶん</sup>よ  
暮<sup>く</sup>せらふふでありうら。醜<sup>しう</sup>夷<sup>ぎ</sup>又款<sup>くわん</sup>れ  
て。交易と盛<sup>さか</sup>よあやう探<sup>たん</sup>といふハ。い  
うよも乃<sup>な</sup>腹<sup>はら</sup>痛<sup>いた</sup>いふでハとさらんら。

才助

頑<sup>がん</sup>六<sup>ろく</sup>君<sup>くん</sup>足<sup>あ</sup>下<sup>した</sup>の理<sup>り</sup>密<sup>みつ</sup>ハ一向<sup>いこう</sup>よりりませ

ん。むき下ハ偏屈る先生の話を聞  
く。居るさるる。僕等のいふ事ハ  
此も。是下の事ハいふ事ハ  
と。先ツ其の僕の愚論とせよ。  
カガ儀何時までもと云やべり  
つ。事として居てハ看官諸君が  
急屈るさつ。才助といふ奴ハ  
名もいふも似合ん。氣のさるるい

所。家ごと。此れりるさるるでござ  
らふ。先ツけで一服中りて。  
跡ハ下の巻で話すとさるる。

交易問答卷之上 終

